正規雇用―非正規雇用間の世代内移動パターンの時間的変化

――2015 年 SSM 調査データを用いた分析――

東北大学　佐藤嘉倫

1　目的

佐藤（2009）は 2005 年 SSM 調査プロジェクトの総括として、労働市場の中核領域では安定性が保たれているが周辺領域では流動化が進行している、と主張した。しかし 2005 年 SSM 調査プロジェクトから 10 年以上たった現代日本では、労働市場の中核領域も流動化している。

この中核領域の流動化は正規雇用セクターと非正規雇用セクターの移動分析に新しい意味をもたらす。従来から、非正規雇用セクターから正規雇用セクターへの移動が困難であることが指摘されている（太郎丸 2009)。しかし中核領域が流動化しているならば、（１）正規雇用セクターへの移動が以前よりも容易になった、（２）中核領域の流動化がその縮小を伴って生じているのならば、正規雇用セクターへの移動が以前よりも困難になった、という 2 つの可能性がある。

本報告では、この 2 つの可能性について実証的に検証する。また中高年フリーターの増加が社会問題となっているが（白波瀬 2010)、この中核領域の流動化は、若年非正規雇用者にとっては正規雇用セクターへの移動が容易になったが、中高年非正規雇用者にとっては変わらないか困難になったという可能性がある。本報告ではこの可能性についても検討する。

2　データと方法

データは 1985 年、1995 年、2005 年、2015 年 SSM 調査データである。なお 2015 年データは v0361 版である。

分析方法は初職と現職の世代内移動表分析である。対象者を性別と年齢別（20-29 歳と 30-39 歳）で分類し、4 つの移動表を作成した。そして正規雇用―非正規雇用に着目した局所ログオッズ比（local log odds ratio）と正規雇用、非正規雇用からの流出率を算出した。

3　結果

男性の場合、年齢に関係なく非正規雇用から正規雇用への流出率が低下している。また男性の場合、20-29 歳層では局所ログオッズ比が低下しているが、30-39 歳層では上昇している。

4　結論

サンプル数が少ないため、暫定的な結論になるが、労働市場の中核領域の流動化は男性雇用者（とりわけ 30-39 歳層）の非正規雇用セクターから正規雇用セクターへの移動を困難にしている。このことは、中核領域の流動化が特定の層に強い影響を持っていることを示唆する。

なお報告当日は職歴データの詳細な分析も追加して議論を深める予定である。

謝辞

本研究は JSPS 科研費特別推進研究事業（課題番号 25000001）に伴う成果の一つであり、本データ使用にあたっては 2015 年 SSM 調査データ管理委員会の許可を得た。

文献

佐藤嘉倫, 2009,「現代日本の階層構造の流動性と格差」, 『社会学評論』, 59-4: 632-647.
白波瀬佐和子, 2010,『生き方の不平等－お互いさまの社会に向けて－』岩波書店.
太郎丸博, 2009,『若年非正規雇用の社会学－階層・ジェンダー・グローバル化』大阪大学出版会.